

# 因子分析による薬剤別の服薬モデルの検討

○城尾裕子<sup>1</sup>・松尾太加志<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>九州女子大学(非常勤)・<sup>2</sup>北九州市立大学文学部)

キーワード: 服薬, モデル構築, 因子分析

Investigation of medicine-taking models among classified drugs by factor analysis

Hiroko JOO<sup>1</sup>, Takashi MATSUO<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>Kyushu Women's University, <sup>2</sup>The University of Kitakyushu)

Key Words: Medicine-taking, Construction of model, Factor analysis

## 目的

人は、何のために薬を飲むのか、どの薬が必要か、どのタイミングで止めるかなど、さまざまな点から服薬に関する独自の考え方(これを「服薬モデル」と呼ぶ)を構築している。城尾・松尾(2012)は、服薬に関する質問紙の特徴的な回答結果の違いから、服薬している薬の違いによって構築される服薬モデルが異なることを示した。しかし、特定の回答結果だけから服薬モデルを推測したにすぎず、服薬モデルの全体像を把握するには至らなかった。そこで、本研究では、質問紙全体を因子分析することによって潜在的な構築要因(因子)を抽出し、それらの因子が薬剤の違いによってどのように異なるかを検討した。

## 方法

**調査対象者** 病院の通院患者、公共施設等の利用者、福祉施設・保育所等の従事者の496名(男性187名、女性309名)であった。平均年齢57.6歳(15~94歳)、2010年10月~12月にかけて実施した。

**調査内容** 服薬に関する質問は27項目(城尾・松尾, 2012)であるが、枝間も含め全部で34問であった。

## 結果

質問34項目中32項目を用い因子分析(重みづけのない最小2乗法, プロマックス回転)を実施し、「薬の理解」、「予防で飲む」、「自己決定」、「飲み忘れ」、「デメリット」の6因子を抽出した。

服薬中の394名(79.4%)を対象に、飲んでいる薬を6分類(がん等の薬、狭心症等の薬、高血圧等の薬、糖尿病等の薬、うつ等の薬、症状緩和等の薬)し、6つの因子得点の平均値を飲んでいる薬剤別に算出した。無回答などの欠損があったため因子得点が算出できたのは134名であった。うつ等の薬は人数が2名だったため分析からはずした。そのうち特徴的なものとして、がん等の薬、糖尿病等の薬、症状緩和等の薬についてグラフに示した(図1)。

**がん等の薬** 命に関わる薬を飲んでおり副作用などは了解の上で服薬するためか、薬のデメリットは低く薬の飲み忘れも

少なく、予防で薬を飲む傾向のある服薬モデルを作っている。さらに、医師の説明に同意して薬物療法を受けているため、自己決定の程度は低かった。

狭心症等の薬もがんの薬と薬の捉え方が類似していた。過去の発作症状の経験から予防的な薬の飲み方をしていると思われる。ただし、がんの薬と比べ、薬のデメリットは少し高い服薬モデルを作っている。

高血圧等の薬もがんや狭心症の薬と同様な薬の捉え方をしている。長期服用が必要で、血圧値などをコントロールするために予防的な飲み方をしている。ただし、デメリットが平均値よりもいくぶん高く、薬に依存することを嫌ったり薬代の負担によるものと考えられる。

**糖尿病等の薬** 6因子ともにほぼ平均的な値を示した。糖尿病教室等で、薬だけでなく食事や運動に関する情報を得て自己管理の必要性を理解して薬を飲む服薬モデルが考えられる。食事の前後に薬を服用するため、食生活の一連の流れに服薬動作が溶け込んでいる様子がみられる。

**症状緩和等の薬** 市販薬を服用している回答者が多いと考えられ、過去の薬の経験から、薬を飲んだり止めたりする自己決定の程度が高くなっていて、また、副作用への負担感や薬を飲む作業の面倒さなど薬のデメリットの程度が高く、薬の飲み忘れの程度も高い服薬モデルを構築している。

## 考察

がん、狭心症、高血圧等の薬の服用者は病気を治すという意識が高く、医師から処方された通りに忘れずに飲むという服薬モデルを構築している。しかし、糖尿病等の薬では、薬だけでなく食事や運動などにも注意を払うため、その違いが服薬モデルにも現れている。一方、症状緩和等の薬は症状に応じて服用するかどうか自己決定しているため、薬に対する捉え方がかなり異なっている。

## 引用文献

城尾裕子・松尾太加志(2012). 薬剤別による服薬モデルの違い—患者が判断する薬の捉え方から検討— 日本心理学会第76回大会発表論文集, 1224.

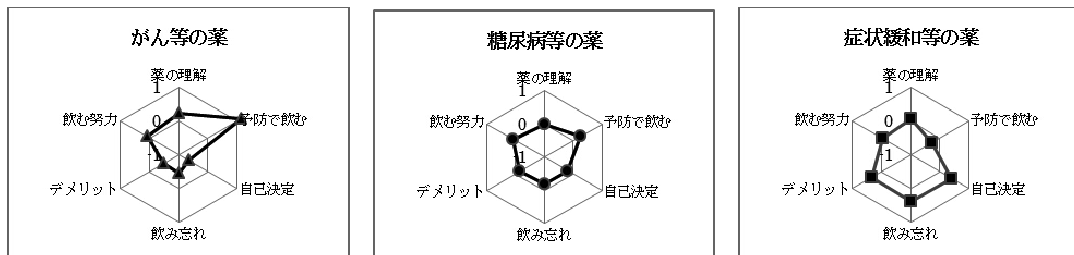


図1 薬の種類別の因子得点